アレクサンドル・ナウメンコ バスリサイタル

ピアノ：アレクサンドラ・ナウメンコ

1部

「エフゲニ・オネーギン」より
グレーミン公爵のアリア ……チャイコフスキー
語るな我が友よ　Op.6-2
森よ、お前たちを祝福する　Op.47-5
ドン・ファンのセレナーデ　Op.38-1
さわがしい舞踏会で　Op.38-3
ただひとこと

「アレコ」より　老人の物語 ……ラフマニノフ
夢　Op.8-5
朝　Op.4-2
全てを奪われて　Op.26-2
悲しい夜　Op.26-12
おお、出て行かないで　Op.4-1

「イヴァン・スサーニン」より　スサーニンのアリア ……グリンカ

2部

アンチャール、死の樹 ……リムスキー・コルサコフ

「ボリス・ゴドノフ」より
ボリス・ゴドノフのモノローグ ……ムソルグスキー

歌曲集「青年時代」より
星よ、おまえはどこに
愛の言葉が何でしょう

兵士が戻ってきた ……スヴィリドフ
イジョールへたどり着く

黒い瞳 ……ロシア民謡
モスクワ郊外の夜はふけて
他4曲

秋

2002 四季のコンサート

2002年10月10日(木) 6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

アレクサンドル・ナウメンコ（バス）

1956年、ウクライナのヴァラジェバに生まれる。子供の頃よりヴァイオリンとアコーディオンを学ぶ。南ロシアのタガンログ音楽学校にて合唱指揮法を学び、その後ロストフ音楽アカデミー声楽科に入学。1979年、モスクワ音楽院に入学し、優秀な成績で同大学院を卒業。ヒューゴー・ティッツ、ニーナ・ドルレアク両氏に師事。在学中に、ドイツにて世界的なバス歌手のハンス・ホッター氏のマスタークラスを受講。オランダのスヘルトヘンボス国際声楽コンクール第1位、及びエリー・アメリング賞（室内楽音楽特別賞）を受賞し絶賛される。1985年から1990年には、モスクワ国立管弦楽団のソリストとしても活躍。1990年よりボリショイ歌劇場のソリストとして、エフゲニ・オネーギンのグレーミン公爵等多くのオペラで主要な役を演じ好評を博す。ロシア国内のみならず、ヨーロッパ各地でもオペラに多数出演している、ロシアを代表するバス歌手。2001年に、傑出した演奏家として、ロシア功労芸術家の称号を大統領より授与される。CDは、ムソルグスキー、ショスタコーヴィチ等のアルバムをリリースしている。今回音楽友の会の為に初来日。

アレクサンドラ・ナウメンコ（ピアノ）

1978年、タガンログに生まれる。モスクワ中央音楽学校を経て、1993年、モスクワ音楽院付属音楽高校に入学。イリーナ・オースィポヴァ氏に師事。1994年、リヒテル、ドルレアク両氏の推薦を受け、タルーサ音楽祭にてリサイタルおよび室内楽、声楽伴奏を行い好評を博す。1996年、モスクワ音楽院に入学。レフ・ナウモフ氏に師事。現在、同大学院伴奏科在学中。モスクワやロシア各地でリサイタル、室内楽コンサートを積極的に開く一方、父アレクサンドルを始めとするボリショイ歌劇場ソリストの伴奏も務めている。第4回浜松国際ピアノコンクールに参加。

アレクサンドル・ナウメンコ
バスリサイタル

ALEXANDER NAUMENKO
BASS RECITAL

曲目解説　　真嶋　雄大

●チャイコフスキー（1840～1893）

チャイコフスキーはあらゆる分野において、西洋的手法とロシア民族色を融合させた色彩感あふれる技法、親しみやすい旋律、そして歓喜と絶望の間を大きく行き交う独自の語法で、人々の深い共感を得た。幾つか作曲した歌劇の中でも《エフゲニ・オネーギン》は特に有名で、台本はプーシキンの同名小説による。ビゼーの《カルメン》に啓発を受けたとされ、巧みな心理描写が見事である。この**〈グレーミン公爵のアリア〉**は第3幕第1場で歌われる。タチャーナ公爵夫人が初恋の人と遭遇して内心動揺をしているシーンで、公爵は「愛は若い日にだけ花咲くものではない。自分はタチャーナを得て幸福になった」と、結婚の喜びを歌い上げる。130ある歌曲も美しい曲が多く、まず歌われるのは**〈語るな我が友よ〉**。亡くなった友の墓前で歌われる曲で、幸せだった過去と、それが失われてしまったと嘆く。**〈森よ、お前たちを祝福する〉**は耽美主義の詩人トルストイ（文豪とは別人）の詩。生涯この胸に友、兄弟、敵、全ての自然を抱くことができたらと歌う。**〈ドン・ファンのセレナーデ〉**は歌曲集《六つの歌》の一つで、全篇オペラティックなタッチで描かれ、小粋でしゃれた旋律は非常に美しい。**〈さわがしい舞踏会で〉**は、同様に《六つの歌》に含まれ、舞踏会であった君をきっと愛している筈とワルツにのせて、シンプルに爽やかに歌われる。**〈ただひとこと〉**は悲しみの言葉を風に投げて、恋人に届けと願う。

●ラフマニノフ（1873～1943）

ラフマニノフは自身優れたピアニストでもあり、その作品は19世紀ロマン派の情念を色濃く反映しながら、ピアニスティックな響きに彩られている。音楽院卒業時に書いたプーシキンの詩による歌劇《アレコ》は、ジプシーの愛の悲劇を描く一幕ものの歌劇。**〈老人の物語〉**はヒロインの父が、レシタティーヴォとアリアの形式で、青春を回顧し娘を残して妻が逃げたと切々と歌う。ラフマニノフはピアノ伴奏歌曲作家としても重要で、80曲余りの作品を残している。**〈夢〉**はラフマニノフ最後の《６つの歌曲集作品38》の第5曲、当時の有名なソプラノ歌手、ニーナ・コシェッツに献呈された。続く**〈朝〉**は《６つの歌曲集作品4》の第2曲、作曲者を看病した友人サフノフスキーに捧げられている。ケルジン夫妻に献呈された《１５の歌曲集作品26》からは2曲、全てのものを失った私にとって残されたのは、神に祈ることと歌う第2曲**〈全てを奪われて〉**と、今この胸の苦しみや愛を伝える人が、何故周囲にいないのかと嘆息する第12曲**〈悲しい夜〉**。そして《６つの歌曲集作品4》の第1曲**〈おお、出ていかないで〉**は、かなわぬ恋心を込めて美しい人妻アンナに献呈された、感傷的な歌である。

●グリンカ（1804～57）

ロシア国民音楽の祖といわれるグリンカが留学から帰ってまず発表したのが、歌劇《イヴァン・スサーニン》である。従来の歌芝居的形式ではなく、西欧的手法とロシアの民族色が見事に融合された作品として完成度は高く、国民の圧倒的支持を受けた。ロシアの大部分を占領した敵国ポーランド軍を偽ってスサーニンは雪深い森へと案内し、策略に気づいたポーランド軍に殺される。その直前〈さし昇る私の太陽よ〉と歌われる悲痛なアリア。

●リムスキー・コルサコフ（1844～1908）

バラキレフ、ムソルグスキー、ボロディン、キュイとのロシア国民楽派「五人組」の一人。組曲《シェエラザード》、《スペイン奇想曲》等で知られるが、作曲理論にも優れ、著作も幾つか残している。多数の歌曲も有名で**〈アンチャール、死の樹〉**は、《バスのための二つのアリオーソ》に収められている。猛毒を持つ樹アンチャールから採った毒矢で諸国を征服していく皇帝の物語。特有の異国情緒を漂わせた重い旋律が印象的だ。

●ムソルグスキー（1839～81）

やはりロシアの「五人組」の一人であるムソルグスキーは、軍人から官吏という地位にあったが、歌劇《ボリス・ゴドノフ》や《展覧会の絵》を代表作として書いた。取り分けリアリズム様式や大胆な和声に優れ、伝統に縛られない新しいロシア音楽を創造したことで知られる。皇帝ボリスは黒幕として皇帝を暗殺し、自らがその位置に就いた。しかし皇帝の座にいながらその心に安らぎはない。そしてこの有名なレシタティーヴォとアリア「わしは最高権力を握った。しかしこの6年間、良心の呵責に責められ続けている」と神の名を呼ぶ。歌曲集《青年時代》からの**〈星よ、おまえはどこに〉**と**〈愛の言葉が何でしょう〉**は、しっとりとした抒情で愛を歌う。

●スヴィリドフ（1915～1998）

哀愁をたっぷり込めた、これぞロシア音楽というような曲調が特徴の、現代ロシアを代表する作曲家。映画音楽、ミュージカルでの活躍も顕著で、本国で数々の賞に輝き、管弦楽曲、ピアノ曲、室内楽、特に歌曲を多く残した。曲はロバート・バーンズの詩による**〈兵士が戻ってきた〉**と、ユーモラスな**〈イジョールへたどり着く〉**。スヴィリドフ記念国際声楽コンクールも開催されている。

●ロシア民謡

あなたの瞳は黒く燃え、心変わりしたといぶかる**〈黒い瞳〉**、モスクワの夜の情景を歌う**〈モスクワ郊外の夜はふけて〉**。